銀河戦国群雄伝 26

ライ

真鍋譲治

Dengeki Comics EX

DC EX

銀河戦国群雄伝ライ

26

真鍋譲治

DE-5-26

発行
メディアワークス

9784840219426

ISBN4-8402-1942-7

C0979 ¥930E

1920979009301

発行●メディアワークス

定価：本体930円 ※消費税が別に加算されます

RAI

BY JOJI MANABE

26

RAI

戦国の銀河を生き抜く群雄たち

【竜我雷】りゅうがらい

本編の主人公。天涯孤独、出自不明の少年であったが、その頃激しさを増していた、銀河統一戦に一方の雄であった五丈国国王比紀弾正の許でその兵歴の第一歩を示す。向こう見ずの性格で、首取り屋などと揶揄されはしたがその度胸と悪運の強さを時の上官、女将軍狼刃に買われて一兵卒より突如師団長に抜擢、弾正の南征時に五丈軍先鋒として南天に雪崩れ込む。南天軍の前線を突破するや、大暴れして要衝、座王都に一番乗りを果たすが、その若さ故に捕虜を皆殺しにしてしまう愚を犯す。だが、その勇名は敵味方に響き渡り、最初は反発していた古参の部下達の心もしっかり摑んだ。その後も、数々の戦功により、昇進に昇進を重ね、弾正の死後、骸羅のクーデター時には、南京楼の太守に収まっていた。初めて地盤を得た雷は、その地で弟代の天才、大覚屋師真を軍師として迎え、また、皇室の娘、紫紋を妻に娶ると、すぐさま中央に反旗を翻し、挙兵する。圧倒的に不利な状況の中、死闘を展開、ついに金州海にて恩師、狼刃を涙をふるって倒した。その余勢を駆って、偽帝、骸羅をも打ち倒し、全五丈を平らげる。その後玄偉、西羌王ら反竜我派の反乱を鎮圧する中、五丈王に即位し、尊号を竜王と称する。西羌と和を結び、着々と国内体制を固める雷に対し、智の正宗とそれに呼応するかの如く北伐を決意した、南天王、羅候率いる南天軍が、ほぼ同時に大挙して五丈領土に侵入、国力が整わない五丈は最大の危機を迎える。雷は軍師、師真の戦力集中による各個撃破の策を取り、まずは開彭沖にて正宗軍と激突、最後には単艦同士での一騎打ちによりついに宿敵正宗を倒した。雷は返す刀で、南天軍主力を六紋海におびき寄せ、天文を利用した戦法で壊滅的な打撃を与える。歴史の分岐点となったこの戦いで雷の覇者への道が確定した。正宗亡き後、瓦解し始めた智政権に言葉巧みに近寄り、智全土に事を進め、正宗の弟である智王を狂乱の中自害に追い込んだ。こうして、三国鼎立していた一国、智を併合することに成功した雷は、また家庭的にも、第二夫人である弾正の娘麗羅との間に跡継ぎ梵天丸(後の二代皇帝文帝)を授かり、順風満帆の中、ついに弾正公を始めとする歴代の北天の覇者が誰も成し得なかった南征に挑む。迎え撃つ羅候率いる南天軍を北京沖で激戦の末撃破、その勢いを駆って、南天首都大王理をも占領した。だがその勝利の美酒を味わうまでもなく、寝返った西羌軍に、斉王都を落とされるという事態が発生、最愛の妻、紫紋、そして宿将孟閣を失うことになる。急遽新鋭艦金剛を駆って、斉王都に取って返した雷は、西羌軍を撃破、その盟主、秦宮括を倒し、西羌国を滅ぼす。こうして、後方での反乱を無事に解決した雷ではあったが、その彼を刺客飛竜の刃が襲い、不覚にも重傷を負う。一時期命まで、危ういと言われていたが、師真等の懸命な努力により、高名な医師扶華の治療を受け回復、再び南征を続けることが可能となった。矢玉による無数の傷を持った強靭な身体と聡明な頭脳を持ち、事に対しての果断即決の対応を常とし、生まれ持った人心掌握術で部下を自由に操り、その助言を大事にする。国事においては冷徹な態度を崩さないが、一歩内に入ると、酒好き、女好きな開放的で磊落な性格の持ち主であった。一方妥協は好まず、自分の意に反し、単独で、南天との和平を策した師真の実の弟、英真に事実上の死罪を言い渡すなど、非情さも見せる。正に清濁併せ持った男であろう。

【大覚屋師真】だいがくやししん

南京楼の豪商、大覚屋の放蕩息子。普段は酒色に溺れて甚だ評判が悪い。だがその知謀たるや史書、経書から兵法、天文、医学に精通した天才的な戦略家である。並みいる諸侯からの度重なる招きをすべて固辞し、時を待つが紫紋に横恋慕したことによる縁で雷に出会い、その才を請われて以来、天才ぶりを余すことなく発揮し、雷の覇業の最大の立て役者となる。六紋海の戦いでは雄大な戦略を立て敵軍師、姜子昌との決戦に挑み、これを撃ち破る。だが一方、実の弟英真の単独講和の動きには頭を悩ましていたが、南天内部における五丈との内応の計が、英真によって破れることになるに至って彼の排除を決意、雷の意に従って殺害を計画する。物事はすべて法と理論により決定されると信じる師真にとって、僥倖や奇跡などというものは頭から否定していたが、雷との出会いによって、その考えも変えなければと感じるようになった。現在、玄偉の元参謀であった華玉とはいい仲、雷とは君臣の間柄を越えた親友である。

【麗羅】れいら

雷の主君であった比紀弾正の娘。勝ち気な性格で、雷との絡みでよく紫紋とは対立し、反乱の罪を被せて紫紋を殺そうとしたこともあった。弾正の死後、国政を乗っ取るが骸羅に国を追われ、雷の許に転がり込み、第二夫人として、雷の第一子でもある梵天丸をもうける。一時険悪でもあった紫紋とも和解し、子育てに励んでいる。

【雲海入道】うんかいにゅうどう

雷の兵卒時代からの戦友。かつては高僧にも仕える身分であったが、大酒飲みが仇で宗門を追われた破戒坊主。

【鐘士元】しょうしげん

五丈軍の勇将。雷の師団長以来の宿将で、その勇猛果敢さで、常に先鋒を受け持ったが、師真のような新参者とは反りが合わず、対立した。だが、次第にその知謀を認め、その指揮下に入り活躍する。だが、雷にとっては最も頼りになる豪傑である。終始、雷とは戦場を共にし、また、雷の密命を帯び、暴政下の武王都より麗羅を救出、無事雷の許に送り届けた。六紋海の決戦においては一軍を率いて奮戦し、雷を守る。

【三楽斎】さんらくさい

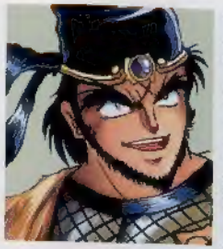
五丈の尚書令。師真に次ぐ、実質、五丈家臣団ナンバー2である。極めて有能な能吏派軍人であり、弁舌の才を持って雷を補佐し、外交、内政面において、その優れた才能を、遺憾なく発揮する。

【姚文】ようぶん

五丈軍の勇将。鐘士元らと共に雷の股肱の臣である。師真とは合わなかったが、その命にはよく服し、戦功を重ね、雷の覇業の一翼をなす。よく書をし、武勇一辺倒ではない男でもある。

【項武】こうぶ

雷の旗揚げ時からの宿将であった項焉の息子で八十斤はあろう大斧を片手で軽く振り回す豪傑である。その武勇を買われ常に先鋒を任される。六紋海では、星海に散った項焉の仇を討つべく奮戦する。



【林則嘉】りんそくか

五丈軍の謀臣。若い頃は風采も上がらず、誰にも相手にされなかったが、南京楼城内に出入りしている間に師真に見出され、雷輔翼の人物として師真と双璧をなすようになる。天才肌の師真に対して、地味ながら、その誠実さをもって数々の献策をし、雷の覇業を助ける。特に金州海の戦いにおいて、焦る雷を勇気を持って諫めたことは、その後の雷の成長を考えると特筆に値する。

【如晦】じょかい

東河の七賢人と呼ばれた処士の一人。田舎において晴耕雨読の生活を送っていたが、五丈を平定した雷により、三顧の礼を持って迎えられ、幕下に入る。

【孟起】もうき

大将軍、孟閣の息子で五丈軍第二世代を代表する青年武将。六紋海での戦いでは、遊軍を率いて活躍、斉王都の危機においては自ら志願し雷に帯同する。

【装伯】そうはく

造船総監装民の甥。五丈軍の技術者の要の一人であり、装民の作った巨砲を自走砲艦として生まれ変わらせた。

【呂朱】りょしゅ

五丈軍の中堅武将。雷の挙兵に応じ、骸羅派の太守を殺して雷の許に馳せ参じた功により、奮威将軍に進んだ。

【鐘才】しょうさい

都役所の下級官吏から鎮南将軍にまで登り詰めた苦労人。六紋海の戦いでは、後方遮断の任を任される。

【楊尚香】ようしょうか

独裁者特有の孤独を感じ始めた雷の心の渇きを潤してくれる寵姫。元々は商家の娘であり、才識に優れ、その性格は明朗闊達である。雷の寵愛を一身に浴び、後宮で侮れない勢力となる。

【大覚屋英真】だいがくやえいしん

師真の実の弟で、南京楼の豪商大覚屋を擁す、五丈産業界の若きリーダーである。その立場から雷の良き経済アドバイザーとして活躍、骸羅暴政後の五丈経済再建に大きく貢献する。だが、南天との戦いが激しくなる中、長引く戦乱に民が疲弊しきっていることを憂い、雷や師真の意に逆らってまでも、南天との講和、持論による南北二朝による天下二分論を主張、単騎、南天に渡り、南天宰相、龍緒と共に、講和を羅候に働きかける。だが、その怒りを受け投獄されてしまう。北京沖の会戦後、許されるが、羅候の信を得ようと急ぐ余り、五丈の内応の計の陰謀を潰してしまう。これにより、雷の怒りに触れ、兄から命を狙われる羽目になる。

【羅候】らこう

南天王。父、羅鶴の死後、兵権を引き継ぐ。当初は南天の大国、智に従属していたが徐々にその勢力を広げ、南蛮国王女、呂峻を娶り、その地盤を強固なものにする。正宗の北伐時には隙を突き、南帝閣を占拠、虎丸を智王に立て、正宗を失脚させる。南蛮王の死去後、その王位も継ぎ、練、南蛮二国の盟主となり南天に揺るぎない地位を築く。その後、正宗が復権すると見るや、素早く智領土の併合を謀り、正宗と智王を遠く領土外に追いやる。次いで、天下統一を目指し、大軍団で五丈に侵攻するが六紋海で完敗する。五丈軍の南征に対しては妻子昌、龍緒らと意見が合わず、両者を罷免、自ら討って出るも大敗を喫する。

【龍緒】りゅうしょ

夏候猷と共に、琉瑛罵洲、羅候の二君に仕えた老臣。実質的には練の宰相職にあり、法令、兵法、いずれにも造詣が深く、北伐にも帯同はしているものの、数多い将官の中にあっては、慎重派である。

【邑峻】ゆうしゅん

南蛮王琉瑛罵洲の一人娘。羅候とは許婚の仲である。南蛮王国との連携を強めるために、羅候の許に輿入れ、百人もの女兵士を従えるなど相当なじゃじゃ馬ではあるが、意外にも花嫁修業には熱心だった。とにかく羅候が好きで好きでたまらないという感じで、それ故に城内を餃子だらけにしてしまうなど、いろんな騒動を起こす。羅候の本格的な北伐にも同行し、身重な身体でありながら、大鉈を振り回して大奮闘した。

羅候より
対五丈交渉の全権を
一任された英真は
あらゆるチャンネルを
使っての外交交渉を
展開した

南天王の全面支持と
あらば
南天内での根回しは
まず必要がない
根回しが必要なのは
当然五丈内部であった

英真とて
戦勝で気を良くし
今や南天の大半を
押さえたかに見える
五丈軍首脳部に
和睦を飲ませることが
どれだけ困難かは
分かっていた

それ故
当然とはいえ
からめ手から
攻める他
なかった

【充興】えんこう

羅候の父、羅鶴の代から南天に仕える宿将。有能な武将ではあるが猜疑心が強く、狭量な性格が災いして、重用されることはなく、後方予備軍の指揮官という閑職に甘んじてきた。しかし姜子昌の亡き後、もっぱら羅候の歓心を買うことに専念。家臣団筆頭の地位を手に入れることになる。

【金角・銀角】きんかく・ぎんかく

南天軍の兄弟武将。姜子昌の配下で六紋海の戦いで辛うじて生き残る。その後智への侵攻に失敗。その彼らの許に五丈の使者が……。

【神楽】かぐら

南天国の女武将。白象戦車隊を駆り八十斤の鎖鉄槌を振り回す猛者である。姜子昌にほのかな恋心を抱くが、六紋海の戦いで、善戦空しく、一度は破った項武に捕らえられ、そのまま彼の妻になる。それでも姜子昌への未練が断ち難く、彼への想いを遂げようと、餃子作りに精を出す。

【李張】りちょう

弾正の元軍師。その弟子には華玉、骸延など知謀の士が多い。銀河の覇者の出現を予見している。

【華玉】かぎょく

玄偉の腹心。李張道師の高弟で、その秘められた力で玄偉の暗躍を助ける。偽帝討伐時には師真と功を争うが、すんでのところで破れる。その後も刺客の梨扇を使い、雷暗殺を謀るが失敗。玄偉の滅亡と共に雷に降り、幕閣に迎えられる。

【蘭々】らんらん

華玉の妹。共に李張に学ぶ。道師としてその能力は未知数だが、紫紋の良き友でもある。玉の輿を狙ったりするなど、なかなかのしたたか者である。

【飛竜】ひりゅう

正宗の側近。姜子昌と共に兵学を学んだ仲ではあるが、互いに違う主君に仕えることによって、敵味方に分かれてしまう。正宗から絶大な信頼を受け、その死後、文字通り粉骨砕身、智国復興に励むが、五丈の進駐を阻めず。母国の滅亡を前に南天に亡命、姜子昌の死後、雷暗殺を企てるが……。

羅候の親書（当然英真が代筆）をたずさえた使者が南天諸部族の許に波状的に送られる

彼ら南蛮諸部族にとって最大の関心事は自国の領土の維持である

それには五丈と南天の戦いに巻き込まれないのが一番であった

そういう彼らであったから五丈と南天の和睦の話は渡りに船であったのだ

また羅候に対しても貸しができる

一部の五丈派の部族を除いて皆喜んで交渉の側面援護を引き受けたのである

五丈の補給線を守るための非主戦力及び兵糧その他をまかなっている南蛮諸部族である

五丈としてもその進言を無下にはできないと英真は考えたのである

第二のからめ手は五丈軍の補給線の確保に多大な貢献をしている商人達である

元々彼らの指導者的立場であった大覚屋の跡取りの英真である話はすぐについた

多くの商人が英真の唱える南北分割統治論を理解したわけではなかった

だがそんな彼らも補給が危うくなっている五丈軍と共倒れになるのは何としてでも避けたかったのだ

和睦による元手の回収は魅力的な話であった

第三のからめ手は
互いの後宮の
個人的な関係であった

もっとも
そのころ
雷の寵愛は
尚香に移っており
それほどの
効果はなかったのであるが……

♪

これまた王妃邑峻よりの
親書を懐に
麗羅の許に使者が
送られる

跡継ぎ・梵天丸の
生母であり
正夫人としての
麗羅の雷への
影響力を
期待してである

こうして
策を尽くして
竜王の外堀を
埋めたつもりである
英真はその子細を
龍緒に書き送ったのである

ふむ……

にわか外交官としては
なかなかの手並みじゃのう

そうは
思わぬか
麟

龍緒に対しての
羅候の勘気が
解けたわけでもないので
公式の使者ではなく
麟を派遣していた

はい
御祖父様

英真殿は
兄・大覚屋師真とは
接触しておるのか？

はい
兄の説得が
一番の難事だと
申しておりました

最期は
兄弟の情に
訴えるか…
それもまあ
人それぞれ…
好きなように
すればよい
麟よ
はい
使いの帰りは
他の者にやらせて
おぬしは
ここに残れ！
え？
ど…
どうして…？
英真殿の周りは
危険が多すぎる
それに
すでにあの男は
殿の廷臣じゃ
何の
不自由も
あるまい
おぬしの
役目は
終わったのじゃ
それでも
わたしは…！
ん……？

え…
いえ
その…
あたし…
若い
若い
だが
若いうちは
その情熱が
一番じゃ
御祖父様!!
ホッホッホッ
殿も竜王も
若い…
そして天下のために
その情熱を
全てをぶつけておる…
背負うものが
無ければ…
良き友にも
なれたであろうにのう…

うおおおお
……

どうだぁ
思い知ったかぁ！
竜我ぁ!!!
羅候様にとって
竜王は
いかなる人物で
ございましょうか？
いけ好かねえ
野郎だよ…！
風雲児だとか
何とか
ぬかしやがってよ！
ことごとく俺の前に
立ちふさがり
やがる…!!
何も持ってねえ
成り上がり者のくせに
あんな奴の許に
なぜか人が集まる！
おまけに
天まで
味方しやがる!!!
ドカッ!!

なぜだ？
なぜ竜我は俺の前に立ちふさがる!?
竜王もそう思っているでしょう
何!?
私は幸いお二方の近くにこうして仕えることができました
羅候様そして竜王…
お二方の想いは同じなのです

お二方共その想いの実現のため武力という手段を用いました
想いが同じ以上常にお二方は出会い剣を交えその火花が銀河を嵐のように揺さぶるのです
いかがでしょう？一度その実現のための手段に武力以外のものを使ってはみませぬか
武力以外…力以外に何がある？
御覧奈たまわれますよう…
ええい！じれったい〃
何だそりゃあ!?

いえ
これだけは
羅候様
御自ら御考え
答えを出して
いただきたいのです！
お願いします!!
だーーっ!!
風呂だ！
風呂に入るぞ!!
はっ
何だってんだクソ！
ブツブツ

ちくしょう
妙にはぐらかしやがって…！
気になるじゃねえか！
力以外か…
カポーン
……
……
きゃあああ
殿が…
殿がぁ～～～っ!!
おおっ
湯あたりじゃ！
氷をもて～～～!!
殿！
お気を確かに!!

そうか
三楽斎が
回復したか
はい
そして以前に
増しての
お働きで
ございます
そうか
まだまだ
三楽斎には
苦労をかけよう
身体を
いたわり
おまえ達もよく
手伝ってやれ
はい
粉骨砕身
力を尽くします!

ところで
五丈国内の様子は
どうだ?
軍需物資・兵糧の
調達はうまく
いっているのか
はっ
そのことで
参りました
残念ながら
思わしくありません…
原因は?
船腹量の
絶対的な不足が
原因かと
思われます
おいおい
何だよ
それをまかなうのが
おまえ達の仕事だろ
船は無いわけでは
ないのです
将軍
ただ
大型高速船を
南天への補給に
優先的に
投入している結果
国内輸送は
小型低速船に
甘んじているのです
よって
それにより
国内輸送力が
極端に低下
原材料
輸送がままならず
また物資集結地に
送ることも
できません

故に
各船団がそれぞれ
寄港をくり返し
それによって
大幅に時を
失っているのが
現状です
作れば
いいじゃねえか
でっかいのをよ！
国内の
ほとんどのドックは
戦艦の修理に
回されているのですよ
また鋼板などの
建造材も
全てそちらに
回されています
じゃあ
何かい！
俺達はここで
空き腹をかかえて
我慢しろと
いうのかよ！
そうは
申しておりませんが
この現状では
やめぬか
二人共！
陛下の
御前だぞ！
はっ…
晏石！

おまえは
内外の物資の
主簿を勤める身
このまま
進軍を
続けるべきか？
そのおまえの目から
見た意見を
聞かせて欲しい
陛下
竜王様!!
遠慮なく
申せ！
腹蔵なき
意見が聞きたい

撤兵すべきです！
やめんか!!
おまえ達 座王都で どんな目にあったか 忘れたか!?
何いっ!!
う…！
きさま～～～っ!!
小役人の分際で!!
戦場のことも分からんくせに大きな口叩くな!!
補給が跡絶えた時 どういうことになるか身にしみて分かっているはずだ!!
補給にたずさわる人間を小役人呼ばわりするのは許さんぞ

申しわけございませぬ…
続けろ 晏石
はい
これから季節は冬になり天候が悪化します
さらに補給が困難になりましょう
私が思いますに開彭・六紋海・北京と大規模な会戦をたて続けに行った結果我が五丈の国力としてはここらが進出限界点です
ここまでを新たな五丈の国境とし兵を国に帰し次の春を待って改めて進撃すべきでしょう
よくぞ申した
退がって休むがよい
ははー―

……
兄さん！
竜王様も
南天王様も
希代の英傑
戦の結果は
時の運であり
互いに相手を
屈伏させるのは
難事です
これ以上の戦いは
もう国民に
何の利益も
もたしません
五丈も南天も
続く戦いの中
疲弊しきっているんです
戦いはさらに
幾年にも及びましょう
その間の民の苦しみを
お考え下さい
天下を取った後
無人の荒野を
所有しても
何の意味も
ありません
林！
ハッ
天下の宰相として
兄上には
このような民の難渋を
救う責任が
あると心得ます
何とぞ
良策を用い
天下国家国民のために
竜王様に奏上
賜りますよう…
はい
取り合えず
各軍団それぞれ
一割の戦艦から
兵員・弾薬を
卸し
臨時に補給用に
廻せ
船足を軽くする
ためなら
兵装・装甲板も
ひっぺがえして
しまえ
分かりました
工作船を
総動員して
取りかかります
戦力は一時的に
低下するが
やむをえん！
こいつで急場を
しのぐ
いいな
師真！

はい
上出来で
ございます…
何？
商人達の
代表が
訪ねて来ただと？
雷
恐らく
補給のことだろう
物資調達は
彼らに任せて
あるからな
泣き言でも
いいに来たのか？

実務を担っている
彼らに
補給の楽観論を
いっても
失笑を買うだけ
ここは一つ
俺に任せて
雷はただ適当に
うなずいていてくれ
大黒屋
大戸屋
島屋
参りました
陛下には
御機嫌
うるわしゅう…
大黒屋で
ございます
島屋で
ございます
大戸屋で
ございます
うむ
遠路はるばる
御苦労である
して
何用か？
はっ
さすれば
物資補給に
関して
恐れながら
言上つかまつりたいと
思います

彼らは
とうとうと
晏石と同じく
補給の困難さを
説いた
このままでは
五丈の経済が
成り立たないと
帥真は
その説に先の
晏石の時にはない
英真の影を
感じ取った
彼らとて
雷の怒りを恐れ
撤兵までとは
いい出しは
しなかったが
節々にそれを
臭わせた
やはりな…
お三方の
意見
とくと聞かせて
もらった
よく諸将らと
相談し
善処しよう
ところでそなたら
経済界の重鎮に
一つ頼みたいことがある

金八百万を
用意して
いただきたい！
な…っ!!
は…
八百万…!!!
いや…
そのような
大金…
我々には…！
いや
誤解なさるな
そなたらに
買って欲しい
ものがあるのだ

実はすでに
制覇した南天を
文化的にも
五丈化していきたいと
考えている
それが我々にとって
一番の安全保障でも
あるのだ
それにはまず
経済の活性化による
人と金の交流が
必要だ
南天における
通商権を
そなたらに
売りたい！

おおっ…！
南天の
通商利権を…!!
その権利を
五丈及び旧智領の
大店二百に限って
与えることにする
どうだろう
新規市場の
開拓はそちらにも
悪い話ではあるまい？
経済界を
束ね
この話をまとめて
くれまいか？
もちろん
通商の安全は
街道の整備共々
我々が引き受ける
はは――っ！
竜王様には
いつもこのような
厚遇をいただき
感謝の言葉も
ございませぬ！

これで
いくばくかは
軍資金の
足しになるだろう
ああ
南蛮から物資の
購入もたやすくなる
年次契約に
しておけば
後々までの
恒常的な収入源だ
帝国建設の
助けにもなるしな
師真…！
晏石は
別にしても
周りに徴収論が
高まっている節が
ある
ああ…
英真だろう…！

あいつは…
何もいわないでくれ！
英真は竜王の臣下ではない以上…
責任を持つのは兄である俺だ…！

お望みの通り調合いたしました…
そうか…
確かだろうな？
はい…
それはもう…
なら飲んでみよ！
ええっ!!

此度のことは
効かなかったでは
許されん！
薬士なら
身を持って
その効果を
証明してみよ!!
おお
お待ち下さい！
そ それがしには
妻も幼子も
おりまする！
後生で
ございまする！
何とぞ
何とぞ〜〜〜っ!!
丞相〜〜〜!!
後生で
ございまする〜〜〜!!
もうよい…
は…
そ…
それでは…
作った本人が
そこまで怯えるのだ
間違いはなかろう

驚かして
すまなかったな
ハ…ハイ…
あ…いえ
それでは
私めはこれで
！

華玉か…
どうした？
私で
試してみたら？

何のことだ…
バカなことは
止めて！
あなた
実の弟を…
口を
はさむな!!

頼むから
もう迷わせ
ないでくれ…
ここ半月の間
地獄だったんだ

でも…
その後も
地獄を
見るわよ!!

人間
大覚屋師真から
軍師
大覚屋師真に
もどれば済むことだ

こうして
様々な想いが
交錯する中
ついに
南天よりの
和睦の使者が
雷の許に
到着した

使者は
龍緒の長男で
内大臣の要職にある
龍箇
龍一族の画策する
南北和睦の
南天側での
主要人物である

事が事だけに
南天側も
最上のカードを
切ったわけである
南天王の家臣
龍箇でございます
此度
竜王様の御尊顔を
拝し奉り
まことに
恐悦至極で
ございます

うむ
遠路はるばる
御苦労であった
立たれるがよい
恐れ入ります
和睦の使者だと
聞いたが
まことか？

左様で
ございます
我が主君・南天王は
民を安んじ国を保ち
五丈・南天両国共に
末永く富貴を
楽しみたいと思い
それがしを遣わしました
何？
これは
異なことを
言う
戦とはおよそ
戦える時は戦い
戦えぬ時は守り
守れぬ時は逃げ
逃げられぬ時は
降るものだ

そして
降れぬ時は
死あるのみ…！
違うか？
そう申されては
身も蓋も
ございませぬ
まずは
我が君の
親書を
ご覧あれ
どれ
羅候が
何と書いているか…
ほ～～～
ここには
和睦の証として
自分の妹を
俺に嫁がせたいと
書いてあるが？
はい…

妹を嫁がせるとは…
本気で羅候は
和睦を考えて
いるのでしょうか？
いや……
南天での
女性の地位は
五丈などに比べても
格段に低い
それは
主君の妹でも
同じこと
血縁を
重視する南天にとって
女は政略結婚の
道具にすぎないからな
使い捨てと
いうことも
ありうると
いうことですか…
かわいそうに…
そうとも
いい切れん
相手が相手
だからな
その者
美人か？
りゅ…
竜王様!?
……
竜王様…！
まあ
まあ
それを
聞いて
からだ

羅候の妹となればさぞかしあばずれ娘であろう

いっとくがこの竜我女にはちとうるさいぞ

名は綺羅

ほう…綺羅か…いい名前だ！

齢は十四でございます

十四か…ちょっとばかり若いなまだ子供じゃないか

いえいえ

若年なれど大変美しくまた聡明なお方

識見高く常々天下の英雄あらずんば夫とせずと申しております

竜王様には相応しい嫁となりましょう

聞くところによりますと近頃御夫人を亡くされたそうで…

そこでという訳ではございませぬがこの縁談をもって和睦の印といたしたく存じます

羅候の苦しまぎれの美人計のつもりか？

それで俺が軍を退くと？

もちろん五丈が制覇した土地は結納金代わりに差し上げます

事が成りますれば南天王御自ら出向き互いの血をすすり両国の間で二度と戦火を交えぬよう誓われるとのこと

これから〝冬〟になりまして互いに物入りになりましょう和を請い矛を収める時と存じあげます

それは明らかに五丈軍の補給状態を見透かしての言葉であった

ふむ…

よかろう…

南天王の誠意よくわかった

こうして和睦交渉の表向きは使節の歓迎の宴によりおだやかに始まった

その方雷と師真による謀議も始まっていたのだ

師真

交渉はなるべく引き延ばす

進まぬ交渉に必ず英真は動くだろうからな…！

その時は…

はっ…

……

うえっぷ…！

う――何だってんだくそ～～～っ!!

南天のヤロー大量に餃子を献上品で持ち込みやがって～～～！

ヤなこと思い出しちまったじゃねえか！

将軍お持ち帰りの餃子包んでおきました

いらんいらん！

第一そりや他の連中の分だろうが!!

何だそりゃ？

うん？

はあ竜王様への超寿級餃子とか聞いてますが

お部屋に運びこもうにも重くて重くて…

しょうがねぇな
俺が持っていってやらぁ
すみません
きゃっ!!
ピュー
うわっ
餃子が
逃げた!!
ずいぶんと
早いお帰りですこと
まあな
うちには
宴会大将が
多いから後は
任せておいても
大丈夫だし
それに
早く尚香の
顔が見たくてな
あ…あら
どーしましょ
やだ…
もう
お上手なんだから~
だけど…
甘言の裏には
秘め事あり!
聞きましたわよ!!
南天王の妹君の
話!!
う…っ
さすがに
耳が早いな
いや何
先の話だ!
アレは
ほ――
第一まだ
正式に云々って
話じゃ…
おいっ
刀を
しまえって!!

もぐぐぐう
竜王様ったら
次から次へと
色んな女と…
いいんです
あたし
耐えます!
……
早く
竜王様の
お子を産みたい
ですぅ〜〜
今晩は
だめだな
え〜〜〜〜っ
どうして〜
まだ宵の口で
ございます〜
これだからな
うわっぷ!!
ぬ…ぬわんですかぁ
こ…この臭いは〜
!!
南蛮名物の
餃子ってやつだ
美味いんだが
これが問題でな
まあ今晩は
おあずけだ
いやぁ〜ん
何事だ!?
うん?
はっ
申しわけございません
怪しい餃子が
陛下の寝所に
忍び込もうと
いたしまして
ひっ捕えたところで
ございます!
怪しい餃子〜〜?
こやつです!
ええい
大人しく
せんか!!

ジャ――ン♡
綺羅でーす♬
お見知りおきを
えっ？
えっ？
えぇぇっ？
餃子って
こんなに
大きいものなの～
んなわけ
ないだろーが
ふふふ
餃子が
しゃべった!?
ぬぬぬ
さては
面妖な…!!!
ふ
ふ
ふ
えぇぇと…
あれ？

きゃあ
きゃあ〜っ！
恥ずかし〜
な何よ
アレ！
ハレンチな!!
しかも
ドサクサにまぎれて
布団の中に
潜りこんで〜!!
あたしが
叩き出して
や…
くっくっくっ
竜王様？
ははは!!
おもしろい
趣向だ！
さすがは
羅候の妹だな
気にいった！
気にいったって…
竜王様！
正気ですの!!
ああ
もういいぞ
餃子娘は
俺があずかる
さあ
おまえもだ
尚香
先に寝てろ
え——っ
そんなーっ!!
安心しろ
何もしないから
話すだけだ
あ——ん！
うそばっかりーっ!!
うっぷ！
パタン
あ——っ!!
竜王様ーっ!!
この女こまし
——っ!!

こらー
開けろー!!
バカーっ!
ふう…
おい
いつまで
そんなところに
潜ってる
ヒョコッ
南蛮の女は
餃子の臭いにも
なれてるんだろ?
据え膳
食わぬは何とやら
というからな!

一方
和睦交渉の実務を
任されたのは林であった
龍箇殿!
貴殿は先程から
和睦・和睦と口にするが
我々の聞き知ったところでは
南天は帝虎級戦艦に
勝る大戦艦を
建造しているとか…
これは和睦を求める
貴殿らの行動と
矛盾するのでは
ないですか?
さにあらず
さにあらず…
武人は平時においても
武具を整え
兵馬を鍛えるもの
いささかも矛盾など
いたしてはおりませぬ
帝虎級戦艦には
散々苦労させられました
それを上回る戦艦の
建造を見逃すわけには
いきませぬ!
ただちに取り壊し
和睦の証に
していただきたい
副軍師殿
我々は六紋海・北京の
両会戦により
大多数の船を失いました
帝虎級戦艦が
数隻あったにしても
いかほどの脅威に
なりましょうや

そもそも
外交の基本は
相手が我々を
どう思っているか
相手に対して毅然とした
態度をとるかに
かかっております

もし我々に
軍事力がなければ
相手国を不合理な
野心に駆ることになり
和睦は還のいてしまいましょう
そのための大戦艦であります

なるほど
自らの手にワクを
はめたように見せ
裏では巨艦の建造という
事実を盾に凄んでみせる…

まるで
狐と狸の
化かし合いですね

はっはっはっ
狐と狸とは
お人が悪いですな

さて…

いかがですかな？
我が南天を
五丈に対しての
必要脅威として
残しておこうとは
思いませぬかな

必要脅威…

さよう…
新生五丈は
まだ生まれたての
国家

内外の引き締めは
必要でしょう
その折に南天という
仮想敵国が必要と
考えられませぬか？

精神的な
脅威なら
よろしいでしょう

しかし南天には
あの羅候殿が
います

竜王様と
同じく大望を
抱かれる方…
南天はその一声で
現実的な
脅威となり
五丈を覆いましょうな

ふむふむ…

さもありなん…

では我々が
その南天王を
除くとなれば…

いかがです？

南天王を
除くですと…!?

さよう
羅候様には
御退位願い
その御子息を
幼王として
立てまする

そして我が父
龍緒が後見いたす

もし五丈が
和睦を飲んで
いただければ

我々には
その準備が
出来ております…！

龍緒郎
失礼しま…
うっぷ…
カチ…
英真殿か…？
……
麟！
そなた…
麟
どうした？
食が進まぬようじゃのう
身体の具合が良くないのか
いえ…
そうじゃなくて…

はい…

何？
おまえも和睦の交渉に加わるだと!?
はい
竜王の考えを左右できるのは我が兄・師真でございます
「理」の人かのようにいわれた兄ですがその真は「情」の人でございます

理を尽くし
兄弟の情に託して
説得してみせます！
どうか
それがしを
お遣わしください
そのまま
帰ってこないつもりじゃ
ないだろうな！
これは心外な！
私はこの和睦に
身命を懸けて
います！
また今は
南天の家臣としての
禄を食む身
殿よりの数々の恩義は
知らぬ者はございません
五丈に留まれば
我が節操が疑われ
笑い者に…
あ――
わかった
わかった
いいだろう
交渉役の
副使として
向かえ！
はは――っ
必ずや
和睦をまとめて
御覧にいれます

失礼いたします
殿！
おう
充興
ちょうど
いい
召し出そうと
思っていた
ところだ！
先程のは
芙真…ですな
ああ
今から
竜王の許に発つ
交渉の手助けを
するそうな
それで
ございますが…
殿は
五丈との和睦など
本気で
お考えなされて
いるのですか？
ふふふ
ははは

兗興！
おまえ俺がそこまでバカだと思っているのか!?
あ…いえ決して…
これを見ろ！芙真の和睦案に乗じてそれに賛意を示した連中だ

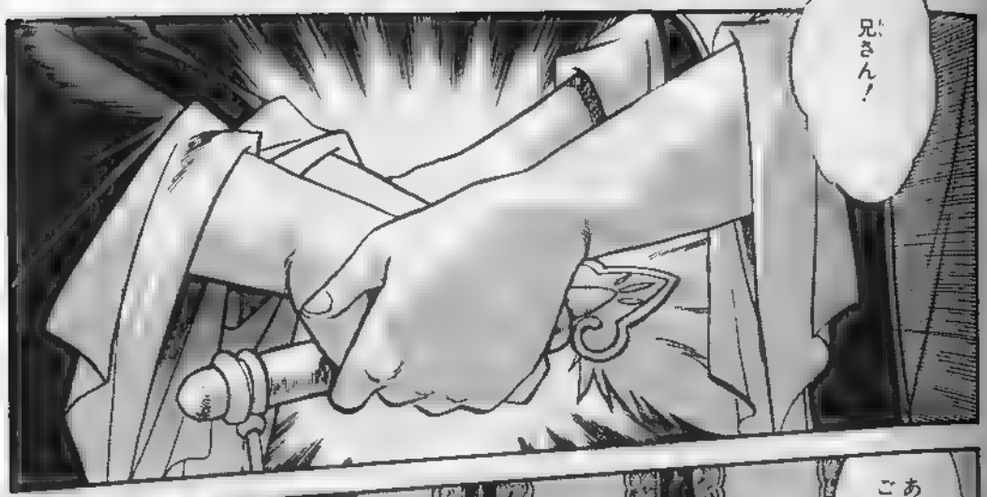
……
龍緒様の息のかかった者達ばかりでございますな
そうよ龍一族とその一派よ！
こやつらが黒幕だ!!

我が南天は破れて和睦を結ぶことなど断じてせぬ!!
それを知っていてまだ和睦とかぬかすのは国を売る奸賊よ!!
うまくあぶり出しましたな…！
こやつらを生かしておけば竜我との決戦時に必ず後ろから刺される！

兗興！
そやつらを消せ!!
ははーっ!!
あ…いや待て！
龍緒だけは殺さずに生かして連れて来い！
いいか！決して殺すんじゃないぞ!!

芙真はいかがいたしましょう?
あやつは放っておけ！向こうが始末する
師真が実の弟をですか？
師真じゃない！
竜我がだ!!

来たか…
はい
内々に
丞相とお話しが
したいと…
客間の方に
通しております
よかろう
会おう


兄さん!

ありがとう
ございます!
もう
会ってくれないものかと
思ってました
……

どうして
そう思う?
だって
兄さんは
ひどく怒っていると
思って…
その…
申しわけ
ありません…!

兄さんの
戒めを聞かず
私は南天に残り
和睦の実現に
奔走し…
北京沖会戦の時も
御心配と御迷惑を
おかけしました
そして
今日は
南天の臣下として
やってきたわけか…！
すみません…
まあいい
おまえが南天で
苦労したことは
知っている…
とにかく座れ
語ることも
互いに多い
だろうからな
ありがとう
ございます
五丈の茶だ
南天では
飲めんだろ
はい！
それでは
いただきます！

ああ
美味しい…
珍味佳肴は
あれど
これだけは
南天では
手に入りません
その昔
大覚屋は
この茶の取り引きで
大店の礎を
築いたそうだな
はい
この戦乱が
なければ
兄さんも私も
茶を持って南天まで
出向いてたでしょう
それが今や
軍師として大軍を
率いて南天に
攻め入り…
かたや
南天の廷臣となり
五丈の茶に飢える
ことになるとは…
戦乱の時代
とはいえ
皮肉なものだ
はい…
いや…
今は再会を
楽しむ時だ
政治の話は
よそう
酒肴も
用意してある
ありがとう
ございます
兄さんと
食事するなんて
久しぶりだなあ

兄さん…！
……
どうしたんです？
さっきから
だまりこんで…
顔色も
悪い…！
そうか…？
いや少し
酔ったかな…
明日
またお話し
しましょう
今晩は
もう
お休みください
そうだな…
酒のせいか
少しのどが乾いた
どうだもう一杯
茶でも…
いいですね
私も一杯
もらえますか？

おい
誰か！
茶を
持ってきてくれ！
誰も
いませんね
まあいい
茶ぐらい
自分で入れる
ああ
兄さん
私が…!!
いいから
座ってろ！
おまえは客人だぞ

パタン
ああ…
これはまた
いい香り…
酒の飲みすぎには
やはり
このお茶が
最高です…
身体から
酒毒が抜け
出るようで…
それでは
いただきます…!
……

英真…
は…はい?
おまえはまだ
五丈と南天が
和睦し
二つの王朝による
銀河支配が
可能と考えているか…?
はい!
必ずや…!
私は
そのために
ここに来ました!!
そうか…

……
兄さん…
ほんとうに
大丈夫なんですか…
汗がすごい…
早く休まれた
方が…
その茶を
よこせ…!!
え?
その茶を
よこせと
いってるんだ!!
早く…!!
ちょ…
ちょっと
兄さん…!!
あっ!!
こ…これは…
毒!?
英真…
なぜ
俺に背いた…

俺に背くこと…
五丈に背くこと…
竜王の考えに
背くこと…
それが
どういうことか…
考えたことがあるのか…!?

実の弟を
殺さねばならん
兄のことを考えた
ことがあるのか…

兄さん…
私は…!
帰れ…!!
今なら
生かして帰してやる…!
帰るんだ…!!

火を放てーっ!!
御祖父様…
英真様…

英真様!
麟!!
逃げるんじゃ!
御祖父様!
ぬぬぬ
これは
何事か!?
南天
ここを
先の宰相
龍緒様の
屋敷と知っての
狼藉か!!

英真(えいしん)!!!

に…
兄(にい)さん…

!!
ごめん！
やめろ！
やめろというのが
わからんのか!!
ええい
離せ！
きさまら
俺の命令が
聞けぬと
いうのか!?
ホォ
ホォ
やめろぉ——っ!!

りゅ…
竜王様!!!
南天との和睦を…
そして…
な 南北二朝による
すみやかなる
恒久的な平和を…

民に…
安らぎを
お与え下さい…！

英真…
英真…
英真…
英真…

ごめんなさい…
俺が殺せないとわかっていたのか…

華玉を責めるな
おまえに弟殺しをさせたくなかったのだ
それに英真の死を命じたのはこの俺だ…!!
……
兄さん…
英真…!!

兄さん…！
私は間違っていたのでしょうか…
そんなことはない…！
この乱世…自分が良かれと信じた道を進むしかない…
正しい 正しくないを問うて何の意味があろう…
南北二朝による統一…私の理想でした…
これで民を救えると…
間違ってはいない…

だがおまえは近くしか見ていなかった…！
近くの理想を見ていたのだ…！
そして我が主君竜王は遠くを見ている
遠くの現実をな…
遠くを…
私には見えなかった…
私には…

安康九年十月
南京楼の商人
大覚屋英真
竜王により誅殺される

多くの南天公卿を
巻き込んだこの謀擬において
兄である丞相・師真の
関わりについて史書には
何も残されていない
意図的に削除されたとも
いわれている

だが後世の人々はいう
「竜王が恐れたのは
英真の言ではなく
その兄・師真の声望で
あった」と…

その声望により
実の弟である
英真の空論が
脚光を浴びるのを
才のうちに摘んだと
いうことだった

当事者である
竜王も
大覚屋師真も
この件について
何も語ることは
なかったという

もちろん
敏慧な師真には
竜王が英真の
青臭い空論を
ここまで恐れ
力ずくで排除しようと
した理由が
自分にあることは
わかっていた

自分は決して
声望を得るために
竜王に尽くしてきた
わけではない…

だがその声望が
結局は
実の弟を
死に追いやったのである

そう考えると
自分の胸に
とりかえしのつかぬ
空虚が出来たことを
感じずにはいられなかった

そなた
あまりにも
竜王に近い

近すぎれば
近いほど
また疎まれ易い

しかし
王の上に立つ者
それはただ一人…

皇帝のみです！

銀河を統一し
帝位に就かれることを
お望みになる竜王様にとって
既存の土着権力は
不必要な存在

はからずとも
竜王と南天王
お二人の考えが一致し
此度のような仕儀と
なったわけです

それでは
英真殿は…

龍一族倒滅に
巻き込まれた
犠牲者だと…

……
どうでしょうか？

龍一族に
英真殿…

竜王様にとって
どちらが
主であったのか
従であったのか…

一方
南蛮王都でも
羅候による和睦派
一掃作戦が繰り広げられた

和睦派も龍緒派も
また明らかに無罪な者も
処刑者名簿に
名前が載ったら最期
一緒くたにされて
首をはねられたのだ

わはははは

五丈との和睦だと!?
片腹痛いわ!!
見ろ! こいつらの腑抜けた面を!!
命惜しさに国を売るような輩はこのような醜態を晒すのだ!
おろか者が思い知ったか!!!
殿の恩顧を忘れおって…
この不忠者共が!
これで宮廷内もきれいさっぱりするじゃろうて!
左様 少しばかり早いが年の瀬の大掃除じゃ!!
来たか…!
殿!
龍緒様が参られました!

久しぶりだな
老君
その後
変わりはないか？

立つがよい
龍緒
老骨の身には
床は冷たかろう
ドヘヘヘ…
恐れいります

殿の
お気に入りと
見える

ほう…
今の公卿の首座は
堯興か…
どうした？
見知った顔が
おらぬか？
……

どうだ龍緒
此度の俺の首尾は？
殿らしき峻烈さ恐れいりまする
では改めて老君に問う！
我が南天は五丈にいかに応じるべきか？戦うのか和を結ぶのか？
ふむ…
旗にまだ精気がある
南天が朝夕でついえることはない…！

それがし南天という社稷を主といたします
社稷の臣としての定めに従うまでにございます
何だと？
つまりおまえは俺の臣ではないと！
俺のために死ぬ気はないと申すのか!?
ツィキ
殿…お考え違いなさいますな
殿も王として南天という国家に仕えておるのでございますぞ

殿に対して
何と無礼な!!
よせ
ひかえろ!
殿!
王は社稷を
守るのが
勤めでございます
その殿が
南天を守るために
和を請うなら
それがし犬馬の労を
惜しみませぬ
また
南天のために
死ぬと申されるなら
お供いたします
それが
社稷の臣と
いうものでございます
ふふ…
ふはははは

老君は
此度の件といい
今の話といい
ことあるごとに
俺に冷や水を
浴びせるな…!!
チッ!!
そいつはいつも
俺の臓腑に
しみわたる…!!
いいだろう!
今の言葉を
答えとしよう
龍緒!
殿上に席を与える!
宰相に
復位しろ!!
仰せのままに…!

殿！
それがしは反対で
ございます！
此度の
謀反の首謀者で
ございますぞ！
首をはねるために
捕まえたのでは
ございませぬか!!
兗興！
辛口の宰相も
必要だと
いうことだ！
む…！
それがしでは
不足と
いうことか…！
さあ
宰相の冠をつけろ！
これより
朝夕左右にはべり
良い知恵を出して
俺を助け
たまには冷や水を
浴びせるがいい！
ただし
首が
飛ばない
程度にな…！
はは――っ!!

辛口の宰相か…
このバランス感覚が
持続すれば
殿は決して
暴君でも暗君でも
ないのじゃが…
古狸めが…
この男――
殿への忠誠心の
塊のようじゃな
こうして
龍緒は
謀反人を転じて
宰相として復位し
本人の思惑とは違う
対五丈決戦の
指揮の一翼を
担うことになる
だが政権内に
与党を持たぬ
裸の宰相であった
軍議を
始めるぞ!!!

姜子昌はどうした!!
宰相の座も定まり軍議を進めねばならん時に軍の総帥である大将軍が何をしている!!
おまえ達姜子昌の居所を知らぬか!?
……
……
どうした? だまっていてはわからんぞ!!

ふむ…龍箇に押さえられていたとはいえ君が泣けば共に泣き怒れば共に怒るだけの阿諛追従の輩か
所詮こやつらは
誰一人殿に真相を語らなかったとみえる
だがこの発興はどうじゃ?
ふん! わしにいわすか…
どいつもこいつも…!
殿…

躊んで
申し上げます
お気を
静めて
お聞き下さい
何だ
回りくどい！
姜将軍は
殿の許には
お戻りにはなりませぬ！
何っ!?
それは
どーいうことだ!?
過ぐる三月末
姜将軍は
北京の会戦以降も
かの地で踏み止まり
五丈軍を迎えうち
戦死なされたよしで
ございます
姜子昌が
死んだだと…!!
うそだ…！
ご立派な
最期であったと
伺っております…
うそだ!!
嘘だと
いってくれ!!!
頼む!!!

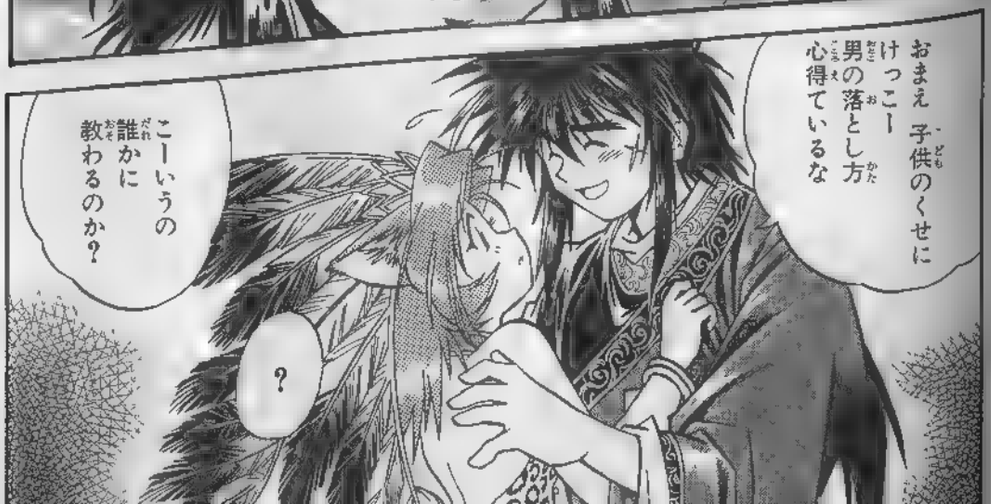
俺は信じねえぞ!!
あいつが俺を置いていくはずがないじゃないか…!!!
ええそうだろうそれはおまえが一番よく知ってるはずだろう!!
共に天下を取ろうと誓ったはずなのに…!!!
そんなはずがあるか…!!!
殿…まずはお部屋にお戻り下され
軍議はまた後ほど…
これ殿をお部屋にお連れするのじゃ
殿参りましょう
お手を…
ええい!離せーっ!!

どけぇっ!!
と…殿(との)……!!
ひっ……!!
バカ野郎(やろう)…!!
勝手(かって)に先(さき)に行(い)きやがって…!

死ぬなら俺と一緒に死ぬべきだろうが!!!
何で一人で行きやがるんだ!!
あわわ…殿!!
お気を静め下さい!
死んでしまいますぞ!!
よいか…!
この血に誓え!!
必ず姜子昌の仇は討つとな!!!
ゴロゴロゴロ
あ…
何か兄様が怒ってる…

綺羅ー！
はーい
何ですか
竜王様ー
帰る支度を
するんだ
午後に
南蛮に向けて
船を一艘出す
え？
どうして？
おまえの兄との
和睦は
ご破算となった
だから
ここにいる
必要は
もうない
幸い
まだおまえは
汚れていないし
だからー
うっそーっ!!
だってあの夜ー！
あれは
味見！
やです!!

綺羅は
天下人のお嫁さんに
なりたいんです
和睦とかは
関係ありません
兄も天下人だけど
仮にも兄妹の間柄…
だから綺羅には
竜王様しか
いません!!
綺羅…


おまえ 子供のくせに
けっこー
男の落とし方
心得ているな
こーいうの
誰かに
教わるのか？
？

竜王様は運命を信じますか？
運命？
はい 綺羅が竜王様に出会えたのは生まれる前からの運命だと思っています
運命か……
それを運命というのならそれも良いだろう
だが現実はどうだ？
おまえの兄の羅候とはこれから命を懸けた戦いをすることになる
おまえの兄の命を奪うことになるかもしれん
それが現実だ
南天国を併呑しその主である南天王を殺しその妹を妻とする…
おまえがどう思おうとも天下統一の証としてその名は利用されることになるんだ
それでもいいのか？
はい！
兄にいわれたからじゃなくて綺羅が自分で選んだ道ですから
おまえすっごく素直だな…
信じられねえほどに…
本気になっちまうぞ

竜王様!!

な…何だ 幽霊か?

びっくり するしやねえか

こっちが びっくりです!!

こんな小さな子供を たぶらかして

竜王様は ロリコンの気が あるんですか!!

あーっ もうヘラヘラ して!!

再び南侵を開始した五大軍は本陣を南蛮王都より十日の地にある虎狼関に進め 雷はその地に全軍の集結を命じた

項武・錚王元・姚文ら
南京楼以来の
宿将に率いられた
五丈軍本隊
雲海率いる
近衛軍
孟起・裴伯元の
若手武官に率いられた
遊軍
そして
秦公旧領の
西羌軍が
到着
続いて
金角・銀角らの
南天よりの降将達が
帝虎級戦艦を
引き連れ
陣営に加わり
南蛮王も
配下の諸部族の
軍勢を伴って
到着した
その他にも
補給部隊
支援部隊などの
非戦力も
集結

全軍の集結を確認した雷はただちに本営を陣払いすると共に師真以下 幕僚らを率いて旗艦金剛に座乗 主だった将を集めた

諸将にここに集まってもらったのは他でもないこれより開始される〝第二次南侵の陣立てを申しつけるためである！

詳細は軍師より申し渡すがその前に俺から一言いっておく！

この戦い…勝つための戦いではない！

戦いを終わらせるための戦いだ!!

戦いを終わらせるための戦い…!?

知っての通り俺はこの乱世に生を受け一兵卒より王にまで駆け上った男だ

人は俺を乱世の申し子…風雲児とも呼ぶ

だが
もう二度と
竜我雷のような
男が現れては
ならんのだ!!

さもなくば
新たな風雲児は
新たな乱世を
生み…

銀河はさらに
終わることなき
地獄を
見ることになる!

肝に命じよ!

風雲児を
生み出す
乱世を終わらせるのだ!!

乱世を母に
人民の血を乳にして
育つ男は
この俺が最後となる!!!

はは っ!!

竜王様の
御言葉
しかと肝に命じ
おきます!!

師真!

は!

諸将よ
今陛下が
おっしゃられた通り
この戦は戦を
終わらせるために
戦うのだ!

よって勝利でなく
羅候率いる
南天軍の
殲滅のみが
目標である!

いわば
羅候も乱世の申し子!
弱小国練の太子から
銀河の半ば 有するように
なったのも
乱世という肉を喰らい
時代が育てた男だ!

よってこの羅候の
患の根を
止めぬ限り
乱世は終わらぬ！
竜虎は
決して同じ
天を戴かぬものだ!!
我々が南京楼より
旗挙げし 艱難辛苦
幾多の戦いを交え
ついに天下統一の
決戦を迎える
ことになった！
戦いは熾烈に
なろうとも
心励まし勇を奮い
太平の御世に
万世の功臣と
称されるように!!
項武将軍！
孟起将軍！
はっ！
その方らに
先鋒を申しつける！
項武を上将とし
二人して力を合わせて
南蛮王都への道を
切り開け!!
はっ
草の根一本残しませぬ！
陛下は悠々と
お続きあれ!!
はは っ!!
虎力王殿
西海竜王殿
紅孩王殿！
はっ
ここに控えて
おります
御三方は
南蛮の地理に
明るい
なれば先鋒の
二将軍の
水先案内として
帯同し
会戦・布陣の
適地をお指図あれ
なお配下の将には
南蛮王都近郊の
焼きうちを
お命じなされ
これは
戦術上というより
二王の忠誠心を
試すためであった
はは っ
拝命仕り
ました！
鐘将軍
姚将軍
秦将軍
呂将軍!!

はっ！

各々方には
それぞれ
中軍本隊の
前軍・後軍
左軍・右軍を
命じる！
ははーっ!!

ははっ!!

雲海将軍は
近衛軍総督として
陛下をお守りせよ
はっ!!

金角・銀角
両将軍は別働隊として
進撃路左右の
街の領民を慰撫し
糧食を集めよ
わかりました！

続いて…
ちょ…
ちょっと
待ってくだせえよ

何だ
以前の軍議で
兵を選抜するとか
少数精鋭で
行くとか
いわれてたじゃ
ないっすか

食い物も
弾も不足してんのに
全軍で行くんですかい？
ふふふ
そのことは
後で話そうと
思ったが…

今回は各々の
軍団隷下の師団を
二つに分けることにする
二つに？

連れて行くのは
そのうち未だ
これといった功を
挙げておらぬ師団だ

その者達の
「恥」を力に
替えたいのだ！

!!

なるほど
未だ無功の
恥を…

ならば
皆等しく
南征の手柄を
得られるわけですな

確かに数は
半減するが
今の我々に
大軍を擁する贅沢は
許されん

だが
数は力にはなるが
決定的な
ものではないことは
今までの戦で
皆も分かって
おろう

連れて行く師団には
それぞれ三回戦分の
武器・弾薬・食糧を
携行させる

数が半数と
なれば
その程度は
賄えよう

それでは
残りはここらで
留守居を？

いや
そうではない

最終戦に
参加したい意欲を
削ぐ気はない

一回戦分のみの
弾薬・食糧を
携行し
本陣より三日の距離にて
後備えとする

装伯・鐘才
両将軍！

はっ

おぬしらに
その後備えを
任す

燃料の消費を
極力押え
ゆるりと付いて参れ

いざという時の
一気駆けに
備えるのだ

はは！

全軍
二十日後には
先鋒軍の確保した
南蛮王都沖の
布陣予定地に
集結！

会戦準備に
ぬかりないように…

だが決して
敵を侮るな！

南天軍は
多くの将兵を
失ったとはいえ
未だ健在！
今回も途方もない
大軍にて
待ち構えておろう

帝虎級を凌ぐ
巨大戦艦の情報も
届いている

諸将は
今晩中に
配下軍勢を整え
給油を済ませ
夜明けと共に
先鋒軍より出陣！

以上だ!!

竜王様！
勝利は間違い
なしでございます!!

竜王様
万歳！

万歳！
万々歳!!!

こうして
雷配下の武将達は
各々の軍団に戻り
出撃準備に
とりかかった

急げ
もたもたするな！

他の連中に
遅れると
笑い者だぞ!!

ははは

腕がなるぜ!!

陛下
一言
申し上げて
よろしいでしょうか
何だ？
陛下の
乱世を終わらせたい
というお気持ち
良くわかります
しかし
速成は禁物
です！

力押しは
するなと
いうことか？
御意…
南天将兵にも
親も子も
ありましょう

力ずくでの
暴殺主義では
奥底深くに
恨み辛みを残し
その後の南天統治に
問題を残しましょう
……
林
俺は覇道を
地で行く男
力で統べる
やり方しか
知らぬし
このやり方が
一番俺に
合っている

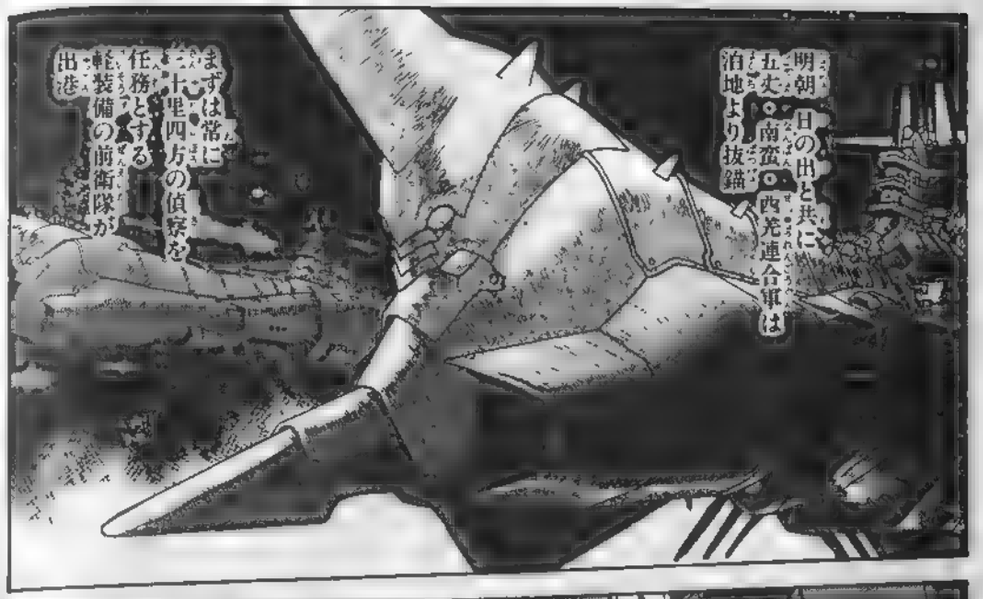
乱世に生を
受けた俺は
人の「徳」やら
「慈悲」やらを
信じてはいない
むき出しの力に
よってこそ
事を成せると
思っている
陛下…

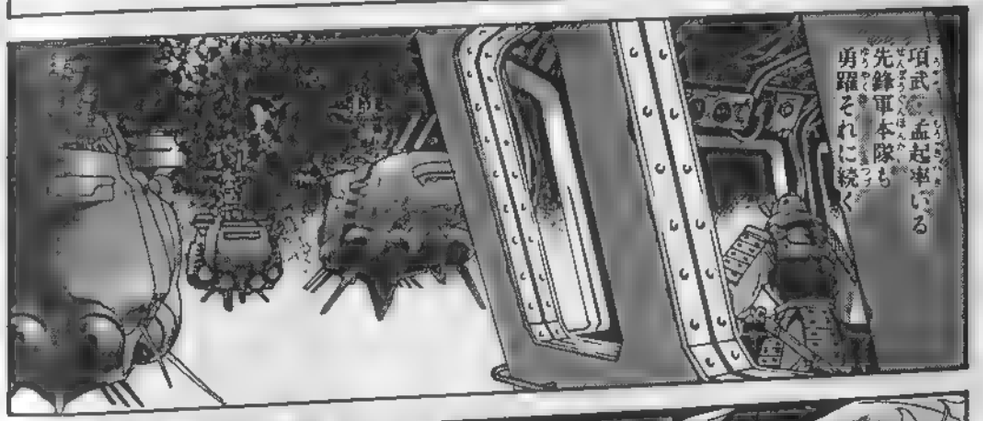
だが
せがれには
別の道を
教えなくてはな
この話は
又の機会にしよう
おまえとは
南天との戦が
終わったら
よく話をしたい
え？

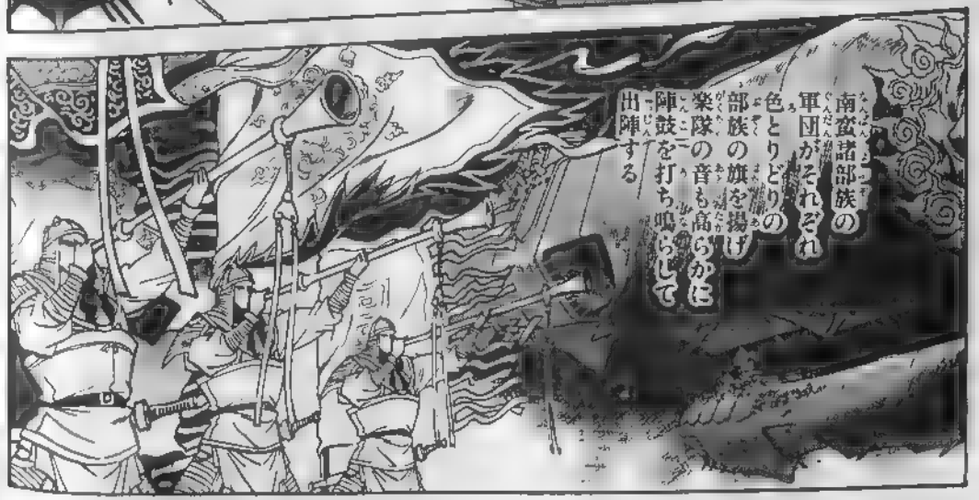
ん？
あら
誰だ
そこに
いるのは!?
お帰りなされませ
竜王様
尚香!!
何のつもりだ
そんな格好で!!
軍議で
お疲れでしょう
お休みになって
ください
連れて
行かぬと
いっただろ!
帰るんだ!!

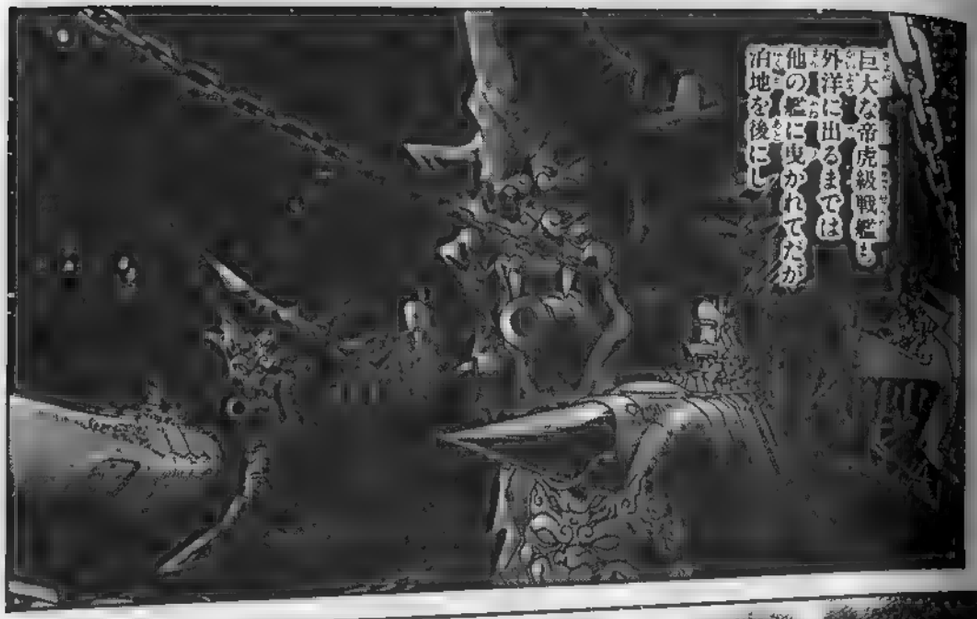
嫌です!
こらっ
尚香!
ぷいっ
ロリータ娘に
鼻の下伸ばして
いるようでは
いつまた寝首を
かかれるか
わかったもんじゃ
ありません
私が
陛下をお守りして
差し上げます!
おまえなぁ…
小便ちびっても
知らんぞ!!
心配してくれなくても
けっこうです!!
あらら
勇ましいね～～
それにしても
ロリータ娘に
鼻の下伸ばしてるかぁ
…ったく
ほんとうの
戦場も知らぬ
くせに…!!
まあ
ドタン場で
送りかえせば
いいんじゃないか

師真
俺達は二人して
大事な者を
失ってしまったな…
俺は妻を…
おまえは弟を…
戦乱の世で
なければ
失うことが
なかった命だ…
いや
俺達だけではない
銀河中で
皆同じ想いを
していよう
なぜ
死なくては
いけなかったのかと…
俺達
生き残った者は
彼らにその理由を
示さなくては
いけない
多くの犠牲を払い
勝ち得た
ものは何だったのか
とな！
俺が作る
新しい銀河とは
どういうものなのか…！
それを
皆に見せて
やりたい!!
見せてやれるさ
それが乱世で
生き残った者の
勤めだろう
うむ…！

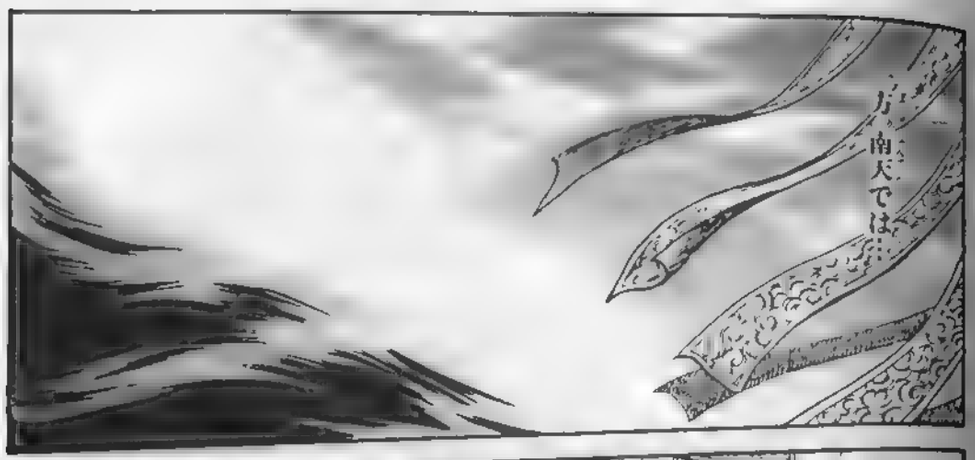

明朝 日の出と共に
五丈・南蛮・西羌連合軍は
泊地より抜錨
まずは常に
二十里四方の偵察を
任務とする
軽装備の前衛隊が
出港

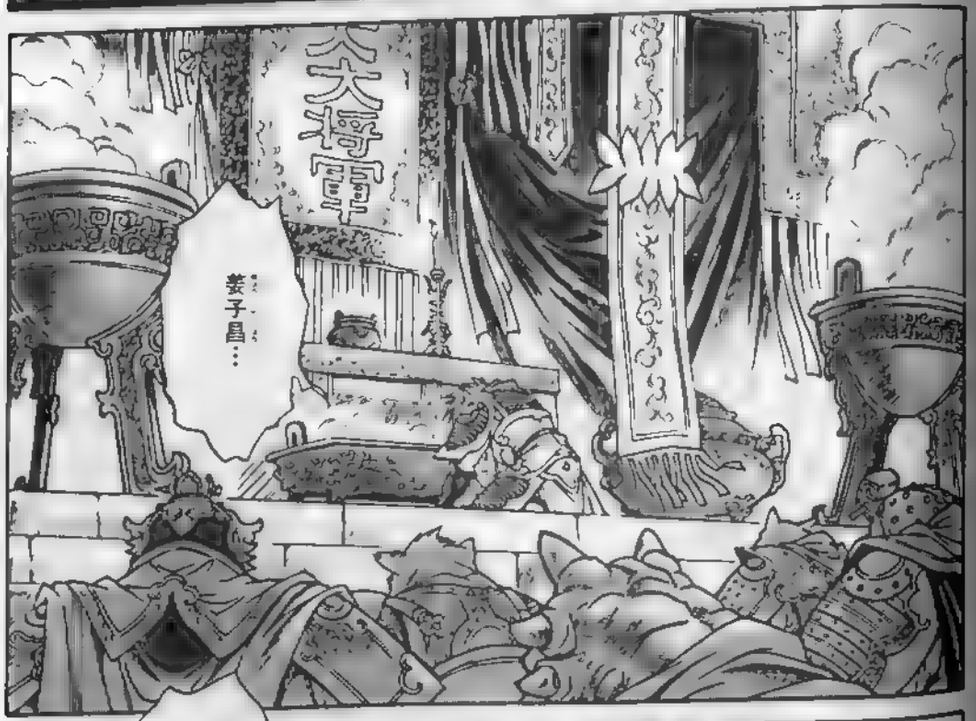

項武・孟起率いる
先鋒軍本隊も
勇躍それに続く


南蛮諸部族の
軍団がそれぞれ
色とりどりの
部族の旗を掲げ
楽隊の音も高らかに
陣鼓を打ち鳴らして
出陣する


巨大な帝虎級戦艦も
外洋に出るまでは
他の艦に曳かれてたが
泊地を後にし

そして
旗艦金剛を
中心とした五丈軍中軍も
前・左・右・後の順で
鳴り響く祝砲の中
次々と出陣した


万が南天では…


大将軍
姜子昌…

おまえは俺を
ずっといさめ続けて
くれたなぁ…
だが俺の
馬鹿さかげんは
直りゃしなかった…
罪ばかりを
人民の上に
積んじまった…！

最終決戦に
向かっての
進撃である

そんな俺に天は禍を下しやがった…!!
俺からおまえを奪った!
俺はこれから誰と共に天を戴けばよいのだ…!!
……
殷…
わかっている…!

よいな!!
これは姜子昌の仇討ちだ!!
何が何でも五丈軍を討ち破るのだ!!
竜我とその軍師大覚昼の首をこの霊前に並べることが勝利の証だ!!
全土に総動員をかけろ!!
戦える者は全て駆り集め来たる一戦に備えるのだ!!

人的資源が豊富な南天であるたちまち数百万の若者が徴集された
元来武を尊ぶ民族である大した訓練もなしで平船に送り込めた
それと同時に王族である羅一門も動員令が下る
羅
南天各地に領民を持つ彼らは一族郎党引っ提げて参加したのだ
また各地の造船所では大量建造されていた戦艦戦え乙状態となれば未完成でも進水させ
大な改帝虎級そして更に強大な超帝虎級戦艦も大勢の工人を乗せたまま合流した

南天も急速に決戦準備を整えたのである
ゴゴゴゴゴゴゴゴ
ガラガラ

今日もずいぶん遅くなりました 明日もお早いのでしょう
お疲れはございませぬか
国挙げての臨戦状態じゃやるべきことも多い
疲れただのいってられまい
ご苦労様です
!!
ぞ賊だ!?
刺客だ!!
何いっ!!
龍緒が襲われただと!!
それで!!
はっかろうじてお命は取り留めましたが…
この大事な時に国の宰相が襲われるとは…
治安責任者の首を斬れ! 俺は宰相宅に行く!!
……
おお殿…

ご安心くだされ
この老骨
未だずうずうしく
この世の空気を
吸わせてもらって
ますぞ…
誰だ!?
誰がやったか
身に覚えは
ないのか!?
殿…
今は国難の
真っ最中
詮索は
無用で
ございます
しかし…!!
殿 それよりも
この龍緒
最早 殿に
帯同はできませぬ
五丈との
決戦に望み
言上仕りたく
存じあげます
ああ
いいぞ
何だ?
さすれば
決して
力だけで五丈を
討ち破ろうと
いたされるな
とはいえ
殿のお嫌いな
駆け引きをしろとは
申しません
じゃあ
どうしろと
いうんだ?
南天の民族意識に
火を点けるのです
我らが勝利するのは
南蛮人の民族意識を
鼓舞するしか
道はございませぬ

代々我ら南蛮人は
銀河中央の王朝により
搾取され続けました
そのことを五丈に屈した
南蛮諸部族に
訴えなされ
また
その頃の
屈辱を
繰り返すのか…!
さすれば皆も
立ち上がり
五丈軍は南天で
包囲されましょう
な…
なるほど…!
よいですか 殿…!
此度の戦は
聖戦で
ございますぞ!
南蛮民族の
運命がかかって
おります!
殿!
新型戦艦が
到着致しました
おう!
すぐ参る
では出陣する!
龍緒
おまえの今の言葉
忘れぬぞ!
殿
お待ちを…

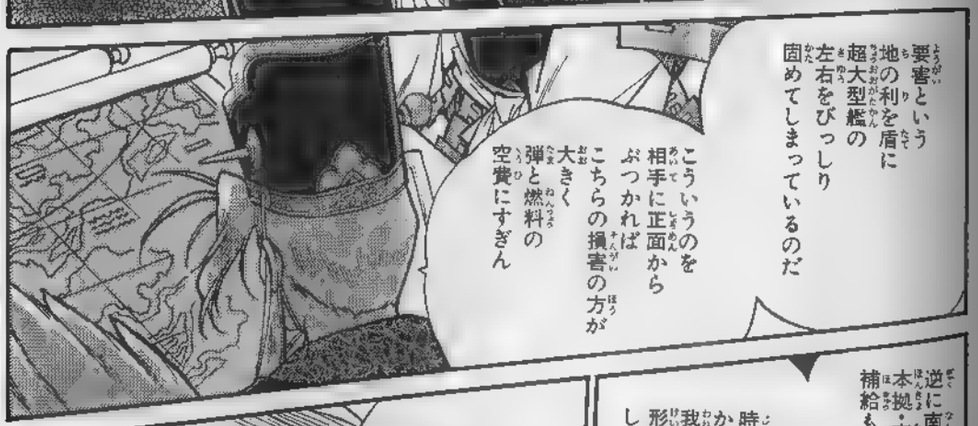
何だ
未だ何か
あるか
ふっ！
決まってるだろう
俺の天下を
見届けさせるためだ!!
それがしの首を
はねなかった
理由を聞いて
おりませぬ
なるほど…
じゃあな！
養生するんだぞ
老君!!
はあっ!!

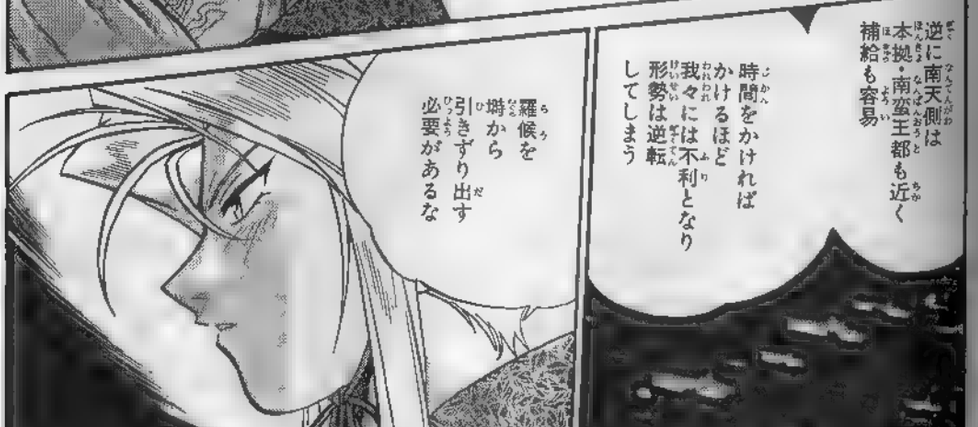
南天
危うし！
何をおっしゃいますか
宰相様
殿が必ずや
敵を討ち破り
ましょう
いや…
殿はわしの提言など
取り入れては
くれまい…
殿を見捨て
謀反人となり
一族は皆殺されたが
わしは罪を逃れた
そして此度は
刺客に襲われるも
命を取り留めた
よくよく
天はわしを
生かしたい
らしいのう…
南天の
運命を最後まで
見届けよと
いうことじゃろう

申し上げます!!
物見の知らせによりますと
南天軍は南蛮王都より東に六十里の所に集結中!
その数 約十一個軍団!
要害の地を選び守備を固めております!!
ほう
また軍勢の中に一際巨大な戦艦を複数確認!

うわさの新型戦艦だな
申し上げます!
南天王・羅候の一族長老の羅幕赦を筆頭にそれぞれ数十万の兵を率いて南天軍に合流した模様!
あいわかった 退がってよい
はっ!!
各軍団長から南蛮王都近海の絵図も届いている
確かにこの付近は要害の地が多い守るに適した地といえよう
それにしても新型戦艦に羅一族御一同の集結か 豪華極まるな

それにしても
あの羅候が
守りを固めて
いるとは…
そうですね
恐り心頭で
襲いかかって来ると
思ってました
やつもバカではない
いくら大軍を率いていても
地の利のない場所の
戦いの結果は
六紋海がいい例だ
しかも兵は
寄せ集めだしな


確かに南蛮人は
勇猛だ
戦士としての
質も高い
かき集めようが
寄せ集めようが
刀と槍でも
持たせておけば
素人でも
それなりに戦える
艦がガッチリ
組み合えば
戦場は一枚の
板の上
足許に
気を取られずに
戦えるからな


ところが
艦を操り
砲弾を当てるというのは
プロの仕事だ
にわか仕込みで
出来る芸当ではない
そのプロが
南天軍には
絶対的に
不足してるとは
いうことだ

だから
羅候は
守りを固めている
のではなく
動けないのだ
しかし…
それはそれで
我々には
やっかいですね

そうだ
動かぬ敵には
策を立てようもない
とはいえ
力攻めも
現時点では
下策だろう

要害という
地の利を盾に
超大型艦の
左右をびっしり
固めてしまっているのだ
こういうのを
相手に正面から
ぶつかれば
こちらの損害の方が
大きく
弾と燃料の
空費にすぎん

逆に南天側は
本拠・南蛮王都も近く
補給も容易
時間をかければ
かけるほど
我々には不利となり
形勢は逆転
してしまう
羅候を
塀から
引きずり出す
必要があるな

戦書でも送り付けますか

羅候の罪を書き連らねやつを怒らせるのです

おっそーいうのなら俺にやらせろギタンギタンに書いてやる！

いやそれだけでは左右の者に止められる可能性がある！

羅一族も集まっているそうではないかそいつを利用しよう！

雷！

ん…？

ふむ…なるほどな…

捕えてある羅真義をこれへ!!

はっ！

―羅真義―

羅一門の勇将で五丈の南征の緒戦撤退命令を無視して秦公旦軍と激突

捕えられ今まで虜囚の身であった

敵将羅真義でございます！

羅真義よおまえ達羅一門はこの南天で悪行を重ね民の上に罪を重ねること甚だしい！

よって俺は天に代わりおまえ達を討つために南天に来たのだ！我が天兵の前に大逆無道なるおまえ達がかなうわけなかろう！

なぜそれがわからぬのだ！

何とでもほざけ!!

一方 五丈軍再進撃の報に
南天軍も
急速に戦力を集結させていた

本来なら即刻
おまえの首を
はねるところだが
断末魔の叫びを
聞けば
畜生とて哀れに
思うだろう
ぐわっ!!
今回は
首の代わりに
耳だけで
我慢してやる!
さあ!
どことなり
失せろ!
目障りだ!!
……!!!

大王理の消滅
歯の暗殺未遂等で
五丈軍の進撃が鈍った中
その時間を利用しての
南天軍の立て直しは
五丈軍の想像以下に進んでいた

その中でも
改・帝虎級と称される
四隻の巨艦の
帝虎級を倍する巨体が
周りを圧していた

南天軍の誇る
新鋭巨大戦艦である

だが羅候の巨艦好みは
改・帝虎級戦艦ぐらいでは
満足できず
ここに空前絶後の
マンモス戦艦を登場させていた

超・帝虎級戦艦
「機神」である…!!

その姿はどうした!!
魔王に
耳を斬り落とされ
討伐されました…
魔我の野郎…!!
耳に耳を
斬られるなど
魔族武人には
あってはならぬ
屈辱だぞ
更に生き恥を
さらしたいのか!!

それがしも
南天の武人…
羅一門の男で
ござる！
自らの
首をはねることなど
いつでも
やってみせましょう
だがこのまま
屈辱にまみれて
死ぬのは
何としても無念!!
例え一兵卒で
あろうとも
次なる決戦にて
一人でも多くの
五丈兵を斬り
果てたいと思います！
殿！
それがしの命…
今一度
お預り下さい!!
羅真義…！
殿！
羅真義の
申し出…
是非お受け
いただきたい!!
長老

此度の
羅真義への
仕打ち…！
我が一族の
武門の誇りが
傷つけられたも
同然!!
羅一族・長老・羅幕赦
■義の恨みと
共に
我が一族の恥を
そそがなくては
なりませぬぞ！
わかっている!!
おぬしに
いわれなくても
この羅候
怒りで全身が
煮えたぎって
おるわ!!
ただちに
出陣して
五丈軍を
迎え討つ!!
羅真義!!
はっ!!

我が新鋭艦
武王虎を
預ける!!
我が先鋒となり
必ずやその恥を
そそげ!!
はは――っ
命に代えても
必ず…!!!
出陣の銅鑼を
鳴らせ!
全軍
出撃する!!
お待ち下され!!

殿より全軍の
兵権を預かる身として
出陣は容認できませぬ!!
何とぞ
ご自重
なされませ!!
邪魔だてするな!
兗興!!
いいえ!
五丈の挑発に乗って
みすみす地の利を
捨てるとは
愚の骨頂で
ございますぞ!!
お控えなされ!!
ええい!
きさまなんぞに
我が一族の恨みが
わかろうか!!
そこをどけ!!
もうよい!
よいから
そこをどけ!!
俺が直接
全軍を
指揮する!!
臆したか
兗興!!
なりませぬ!!
殿!!

動けば必ず
敵の術中に
はまりますぞ!!
くどいぞ
離せ!!
不吉なことを
申すな!!
と…殿……!!
お待ちを……!!
……
兗興将軍
おぬしの取りこし
苦労じゃよ
なあに
我が巨艦を前に
五丈軍なんぞ
一ひねりよ!!
いや
姜将軍なら
殿をお止め
できたであろう!
あ――
そりゃおぬしは
姜将軍では
ないのは当然だし…
殿と
姜将軍は
特別であろう
そう特別!
戦では
怒りは決して
力にはなり得ぬ…!
?
?
そ…そうなのか?

こうして
羅候は一族の怒りに
引きずられたとはいえ
要害の地を放棄し
洋上へと全軍を繰り出した

南天軍出陣の知らせを聞いた師真は直ちに進撃中の諸将を呼び寄せ来たる会戦における細部に渡る打ち合わせを行った
断固羅候を逃してはならん!!
そのためにも敵を懐深く誘い込み退路を断ち完璧な包囲陣を形成するのだ!
そのためにも私は諸君らに古来兵法の一つを伝授しよう!

「豹の陣・虎の陣・獅子の陣」をもって南天軍を撃滅する!!
獅子?
虎?
何のことですそれは?
この三匹の獣の中で最も弱いのが豹!
これを第一陣とし敵に突破を許し油断させる
第二陣は虎だ!
これには最強である獅子の陣まで敵を誘い込むのが任務だ!
そして獅子の陣にて敵を粉砕する…!
だが兵法の常法であるこれだけでは不充分だ!

故に最期に
竜の陣にて
締めあげるのだ!!

なるほど
そうすれば
包囲網は
完璧ですな

最期が
竜王様の
竜とは考えたな
軍師!!

まあな

歴史的な戦いに
なるんだ
一つぐらい
しゃれっ気が
あってもいいだろう

豹の陣…
つまり第一陣は
南蛮部族王の
御三方に
お任せする

はっ!!

先陣
承りました

元部下であった
御三方を見るや
羅候は怒り狂って
襲ってきましょう

はっ!
お任せを

ほどほどに
戦い うまく
かわして下され

金角・銀角将軍は
それぞれ御三方の
左右に陣取り
支援せよ

はっ!!

突破されれば
南蛮軍と共に
左右に大きく
迂回し
後の包囲陣に
加われ!

突破した
南天軍は必ずや
陣形を整え
我が軍の出方を
うかがおう

その暇を
与えずに
我が虎の陣を
押し出す!

竜王様には
この虎の陣を
近衛軍を率いて
お任せしとう
ございます

囮だな

はい
羅候は
陛下を討ち取ろうと
躍起になり
陣を整えずに
進んで参りましょう

しかし
危険すぎは
しませぬか？
陛下を
砲弾の雨の中に
さらすような
ものですぞ

危険は承知の上だが
この策
何が何でも後方の
獅子の陣まで
羅候を引き寄せねば
ならん

雲海将軍
陛下を
よくお守り
してくれ

はっ
万全を
尽くします！

それがしも
一軍を率い
羅候を牽制します
陛下はその隙に
後方の獅子の陣へ
お移り下さい

わかった
気遣い無用だ
立派に囮の役を
果たそう

残りの諸将は
獅子の陣にて
左右に埋伏せよ
敵が陣に入れば
一気に押し出すのだ！

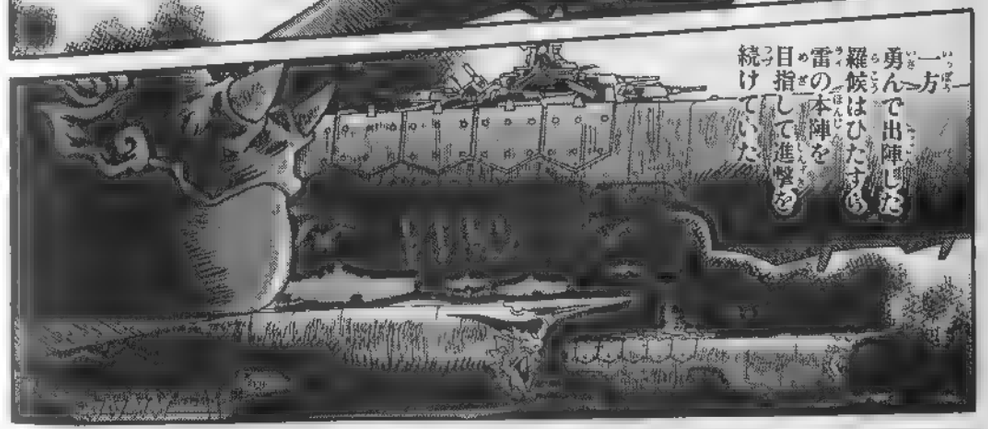
そして
装伯・鐘才の
後備えの軍にて
包囲陣を作る
豹の陣の軍も
それに加わり
後方・退路を
遮断する

これが
竜の陣…！
これにて
南天軍は
一兵たりとも
逃れられぬ！
後は殲滅するのみ!!

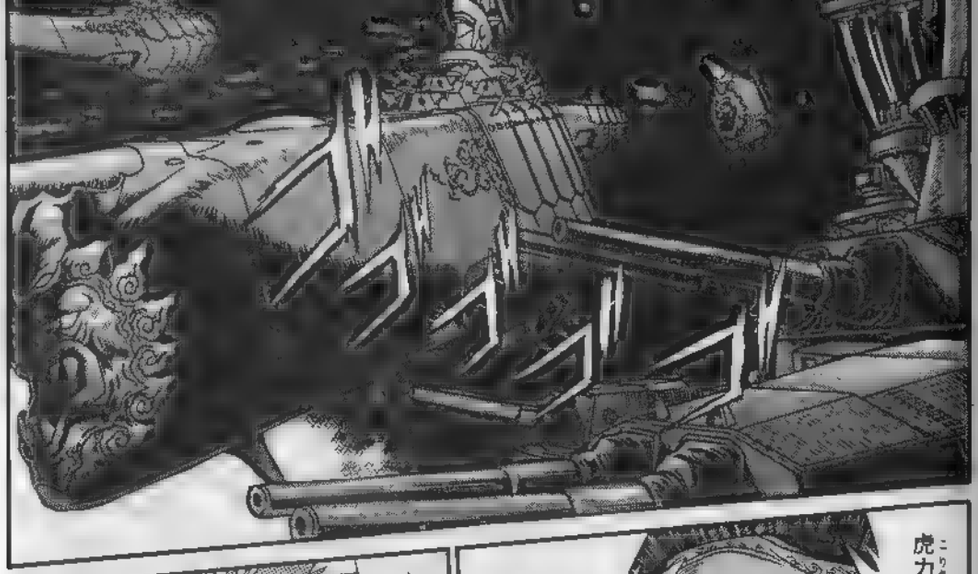
お見事です！
これで
羅候も
終わりだ！

敵の突進力は
当初は
すさまじいものだろう
どのように砲火が
荒れ狂っても
諸将は冷静に
行動し
我が指揮に
従って行動なされ！

五丈の諸将は
師真の策に納得し
それぞれの布陣に
散っていった


一方
勇んで出陣した
羅候はひたすら
雷の本陣を
目指して進撃を
続けていた

殿！
五丈の先鋒軍で
ございます!!
おう！



虎力王だと!?
西海竜王に
紅孩王の旗印も
見えるぞ!!
あの恥知らず共が!!
敵に尻尾をふって
先陣を引き受けるとは
言語道断

殿！
それがしに
出陣を
御命じあれ!!
よし！
行ってあのバカ者共の
目を覚ましてやれ!!
はは――っ!!

これで
夢から覚めいっ!!
うてぇ――っ!!

羅真巍よ!
天兵の行く手は
いかにしても阻めぬ!
南天王に見切りをつけ
早々に降れ!!
黙れ!
この恩知らずの
逆臣が!!
ささまらのような
節操なしには
生きている資格は
ないわ!!
敵が
繰り出して
参りました!
旗印は
羅真巍です!
全軍
砲雷撃戦用意!!

撃て!!
反撃じゃ!!

うおおっ!!

わはははは
かゆくもないわ
そんな豆鉄砲!!
それ!
押し出せ!!
ゴオオォ
ゴオオ

三部族王を
援護する!
撃ち方
始め――っ!!
むっ!!
ゴオオ

な…
何だぁっ!!

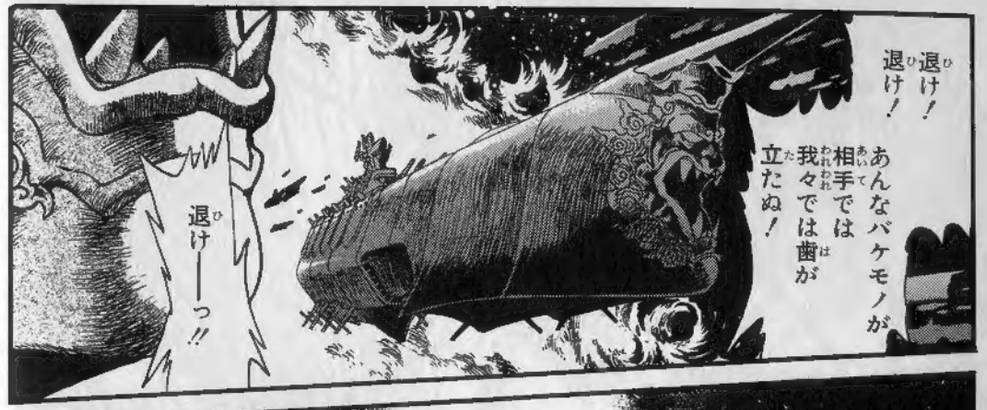
むっ
あれは
金角!
北京沖では
欲に目がくらんで
裏切りやがって〜〜〜!!
あいつらだけは
断じて
許せん!!
回頭——っ!!
艦首主砲
射撃用意!!

ドカーン
う…
うおっ!?
兄者ーっ!!
て…帝虎級戦艦が
一撃で!?
あはは

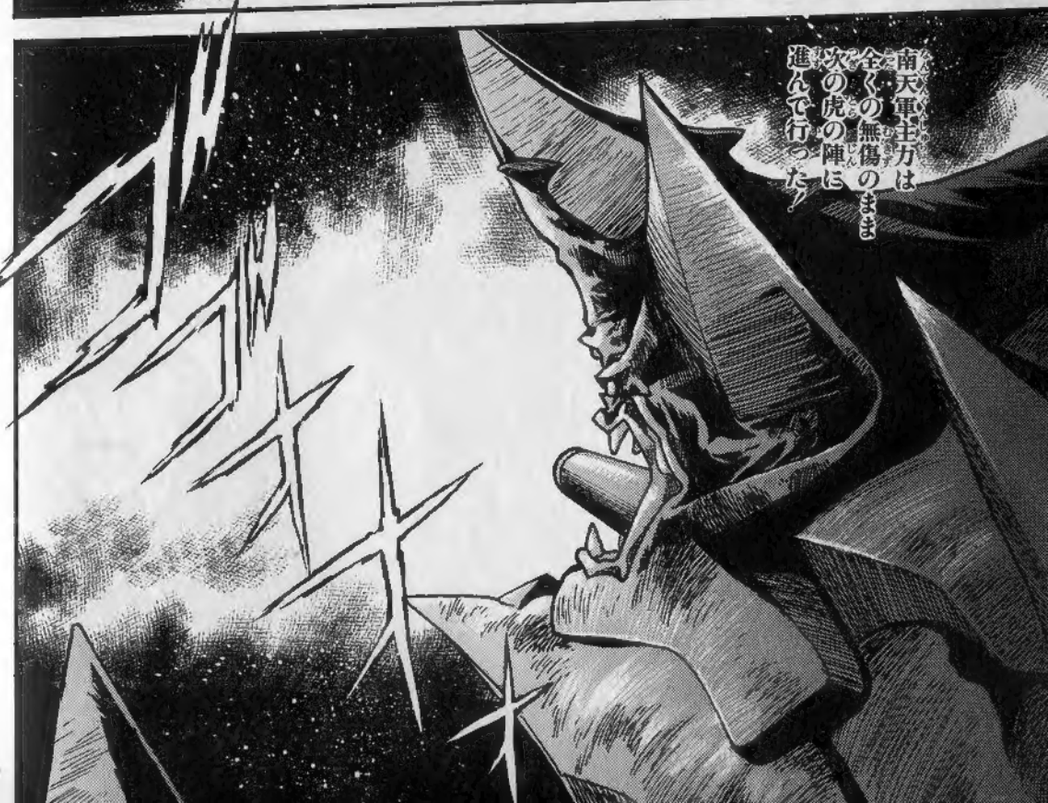
ドカーン
わあああ

銀河戦国群雄伝

ライ


退け！
退け！
あんなバケモノが
相手では
我々では歯が
立たぬ！
退け――っ!!

圧倒的な
火力差に
五龍軍の釣の陣は
たちまち壊乱


南天軍主力は
全くの無傷のまま
次の虎の陣に
進んで行った!!

勝利は我がものだ!!
続け――っ!!
一つの銀河!
一人の帝国!
一つの皇帝!
今、竜我雷の最後の戦いが始まる!
「銀河戦国群雄伝ライ」ついに最終巻!!

大将!!
銀河統一!!
それは見果てぬ夢か
飽くなき野望の結果か!!
竜王様だ!!
多くの者がその夢を追い
男達はその野望に全てを懸けた!!
だが果てしなく戦いは続き
ある者は志半ばに倒れ戦塵と化し
又ある者は夢を胸に秘めたまま
暗い銀河の彼方に消えていった

Dengeki Comics EX

銀河戦国群雄伝ライ㉖

2001年 8 月25日　初版発行

著者　真鍋譲治

発行者　佐藤辰男

発行所　株式会社メディアワークス　〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館 電話03-5281-5214(編集)

発売元　株式会社角川書店　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 電話03-3238-8605(営業)

装丁　朝倉哲也+design CREST

印刷・製本　共同印刷株式会社　カバー印刷　第一美術印刷株式会社

©JOJI MANABE 2001

R本書の全部または一部を無断で複写(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

初出／月刊電撃コミックガオ！ 2001年1月号～5月号(メディアワークス刊)

ISBN4-8402-1942-7 C0979